

「どうして君（中村）は、このタイミングでこの子に手を差し出したのか？」「君はこの時、何を考え、どのような判断でこのような行動をしたのか？」

これは、私が30歳を迎えたばかりの頃、ある重症心身障がい児施設において、授業を受け持たせてもらった時、毎回のように恩師から投げかけられた言葉です。重症心身障がい児とは、児童福祉法によると「重度の知的障害及び重度の肢体不自由が重複している児童」とされています。私が受け持ったのは小学部1年生の男子児童で、言葉によるコミュニケーションは困難、視力、聴力は不明、手や足の動きはほとんど見られないと言われていました。この子の前に初めて立ったとき、どのように授業を進めていけばいいのか、私は立ち止まってしまいました。



1時間の授業をビデオに収め、事後、その様子を恩師と共に確認することが繰り返されました。恩師からは、その子の動きというよりも、私の関わりの在り方について注目するよう指導を受けていました。そのたびに、冒頭で紹介した言葉が容赦なく私に投げかけられました。何をどうしていいのか分らず、なんとなく授業を流していることを見透かされていました。ある日、私が、ほんの一瞬子供から目を離しているとき、その子が手を動かしている画面を見て、「この子は、この時、全ての力を振り絞って手を動かしているんじゃないか。もう二度とないかもしれないこの大事な時間に、君はどうして他のことに気を取られ、見逃してしまっているんだ。」と厳しい言葉を受けました。その言葉には、子供に対する深い愛情とともに、どれほど障がいが高くても、動きが見られないとしても、人は外からの刺激に対して、何も反応しないことは絶対はないという肯定的な確信がありました。

この時から、「この子は手を動かしている」ことを前提としたかわりが始まり、手の動きをコミュニケーションの手段にしていくことが目標となりました。その後も、綿密な行動観察を重ね、そのうち手を動かすよりも、顔を左に向ける動きの方がこの子にとってはやりやすいことに気付きました。そこで、マイクロスイッチの柄の部分にスポンジを付け、ラジカセに連動させて、この子の左ほほにスポンジスイッチを当て、顔を動かすとスイッチが入り音楽が流れるという活動を繰り返しました。何度も繰り返す中で、音楽が止まると自ら顔を左に向け、音楽を再開するという行動が見られ始めたのです。障がいが高いからという理由で、体が動かない、音は聴こえないという周囲の評価を打ち破った瞬間でした。まさに、「僕は、音楽が聴きたいから動きで示すんだ。」というコミュニケーションの表出でした。命が輝く場面でした。

この授業の実践を経て、障がいがあるとか、無いとかではなく、目の前にいる一人の子供と

純粋にただひたすらに気持ちを分かり合おうとすることが何よりも幸せであり、そのために子供からのわずかな発信を見逃さない感性を研ぎ澄ましていくことや、「これだ」と思える教材の開発に没頭できる時間を作ることが教員としての本懐であると思えるようになりました。

私が養護学校の教員になりたいと志望するようになったのは、高校生の時、部活動の練習中に大けがをして大きな病院に運び込まれたことがきっかけでした。その病院は肢体不自由養護学校(当時)を併設していて、通院のたびに出来る車いすに乗った子供たちの笑顔、近くにいる先生や看護師さんの温かいまなざし、そのすべてが輝いて見えたのです。

念願の養護学校の教員になってから、そして、もう少しで教員生活を終えようとしている今日まで、その時に感じた輝きと同じ、それ以上の輝きを身近に感じ、子供たちの命の輝きに励まされ続けてきました。このように幸福な時間をともに過ごすことができた多くの子供たちに感謝しかありません。